大　会　決　議

２０１８年７月７日、私たち西予市野村町民は、野村ダムの放流によって、大切な財産を奪われ、生活を奪われ、思い出を奪われ、健康を奪われ、かけがえのない家族や友人を奪われました。

８月に行われた「説明会」において、野村ダム管理所からは、「想定外の豪雨であり、野村ダムは操作規則に基づいた操作を行った。」と、災害責任を否定する答弁しか返ってきませんでした。

野村町民からは、
「ただマニュアルだけを守り、人の心を持たないダム操作が、命や財産を奪った。責任をとれ。」
「想定外の豪雨であるなら、事前放流など、想定外の対応が必要だったはずだ。操作の間違いを認めろ。」
「過去には、大洪水も人命も守ったダム放流の事例が、ほかの県にある。野村ダム放流による浸水は、災害ではない。人災だ。」
など、怒りや疑問の声が多数挙がりました。

しかし、「説明会」は機械的に進行され、野村町民の願いに応えるものではありませんでした。
国土交通省が主催した「検証会合」も、形式的に進められ、地域住民の声に真摯に向き合うものとはなりませんでした。

被災住民を中心に結成された「野村の未来を守る会」では、降水量の増加が予想されるこれからの時代には、本気で人命や財産を守ってくれるダムのあり方を、住民主導で話し合っていく会合が必要だと考えました。

初め、「野村ダム放流についてただす会」としていた会の名前は、野村ダム管理所などからの要請により、「野村ダム放流の説明をきく会」と変えました。

しかし、野村ダム管理所は、「野村ダム放流の説明をきく会」への参加回答の約束を７回も破り、地域住民と向き合うことから逃げ続けてきました。野村ダムには、住民と直接向き合えない、後ろ暗いものがあるとしか思えません。
一度は参加すると返答した愛媛県も、参加回答を急に保留にしてきました。
そしてダムと県は、今日の会の４日前になって、参加を言い始めたのです。
それは、会の様々な準備がもう変更できにくい、間際になってのことでした。

わたしたち野村町民は、野村ダムから受けた今回の災害を、決して忘れません。やっと住民の前に出ようと言い始めたダムと県には、今後、新しい会への出席を求めていきます。ふるさとを守るための粘り強い取り組みを、決してあきらめません。

以上のことを野村ダム管理所と国土交通省、愛媛県に通告し、ここに決議します。

２０１８年１２月１０日

「野村ダム放流の説明をきく会」参加者一同